

# 副詞「一体」の歴史の変遷

福田 奈緒美

## 一、序論

現代の日本語において副詞「一体」は、「向こうに見えるのは一体何だ」、「犯行の動機は一体何だったのだろうか」などのように、疑問を導く働きを持つものとされる。しかし、近世文学、近代文学にある「一体」には次のような例がある（傍線は筆者が施す。以下同）。

・ 一体おいらア吉原で育たから、深川へゆくと水あたりがするヨ。  
（山東京伝『繁千話』）

・ 躰小供に大金を持たして夜中に出すといふが不心得だ  
（坪内逍遙『細君』四）

・ 一体貴方はあんまり研究家だから駄目ね。

（夏目漱石『明暗』十二）

これらの「一体」は疑問を導いていない。現代の日常的な用法ではないため消えてしまったといえる。では、近世文学、近代文学の「一体」とは如何なるもので、また如何なる経緯で疑問を導く副詞として定着したのか。本稿では、近世文学、近代文学から採取した用例に基づいて、副詞「一

体」の歴史の変遷を論じるものである。

## 二、疑問を導かない副詞「一体」の出現状況

近世文学、近代文学から採取した副詞「一体」の用例数を、疑問を導く例（以後「一体・・・疑問」）と疑問を導かない例（「一体・・・非疑問」）とに分け、その数を表1に示す。尚、備考には「一体」に助詞が下接している例を記す。使用した資料は次の通りである。

『嘶本大系』（東京堂出版）、『新編西鶴全集』（勉誠社）、

『近松浄瑠璃集上』『近松浄瑠璃集下』『竹田出雲並

木宗輔 浄瑠璃集』『繁野話 曲亭伝奇花钗児 催馬楽奇

談鳥辺山調綫』『近松半二 江戸作者 浄瑠璃集』『修紫

田舎源氏上』『修紫田舎源氏下』（以上、岩波書店）『新

日本古典文学大系』、『假名草子集 浮世草子集』『英草

子 西山物語 雨月物語 春雨物語』『洒落本 滑稽本人情

本』（以上、小学館）『日本古典文学全集』、『黄表紙 洒



### 三、疑問を導かない副詞「一体」の位置づけ

ここでは、疑問を導かない副詞「一体」をどのように位置づけるかについて述べる。

(1) しかし御新造さんはわかつたお方さ。「一体お慈悲深いから勤る者の仕合せ」  
〔浮世風呂 三・上〕

(2) 「一体西洋の繪にやア風流な澁いところがありやア仕ねへ」  
〔西洋道中膝栗毛 一五・下〕

(3) 「一体禪とか仏とか云つて騒ぎ立てる連中程あやしいのではないぜ」  
〔吾輩は猫である 九〕

これらの例の「一体」以下に述べられている、(1) (御新造さんが) 慈悲深いから勤める者が仕合せである、(2) 西洋の繪には風流で澁いところがない、(3) 禪とか仏とか云つて騒ぎ立てる連中程あやしいのではない、という内容はいずれも話者自身の判断によるものである。「一体」はそれらの文頭、または文頭付近に位置し、以下が話者の判断、主張であることを表明する立場にあるといえる。また、「一体」を省いても文意には影響しないところからすると、「一体」は伝達上のものであることが分かる。これらを踏まえて、本稿では疑問を導かない副詞「一体」は「話者の判断や主張を強調するものである」と定める。

### 四、副詞「一体」の歴史的変遷

a 名詞「一体」

今回の用例調査で副詞「一体」を採取できたのは『繁千話』以降の作品であったが、それより前の作品では名詞としての「一体」のみが見られた。明治書院『日本語文法大辞典』によると、副詞「一体」は「名詞『一体(一つのからだ)』から転じた副詞(山口明穂執筆 四九頁)とされているため、ここでは名詞「一体」について触れておきたい。辞書に記載される名詞「一体」は次のようなものである(『日本国語大辞典』第二版より)。

① 全体が一つのものになっていること。一つにまとまっ  
ていて、分離できないもの。

② 一つの身体。同一体。

③ 一つの関係。分離しがたい関係。同類。

④ 「体」は助数詞) 仏像、彫刻などの一つ。仏や神そのものにも用いる。

⑤ 一つの風体。一つの風趣。一つの様式。

⑥ (助詞「に」を伴って副詞のように用いられることもある) 全体。全般。一般。おしなべて。

これを見ると、「一つのまとまり」の意や、物を数える際の言い方など、意味としてあまり確定的なものでないこ

とが分かる。

しかし、今回採取した用例のなかには次のようなものがある。

(4) おまへはく、折く／＼毒性なこといはんすけれど、  
「体の性根は直なお方ぢやナ。」 (『浮世風呂』四・中)

(5) かういふ訳でかうだからワタクシも悪いけれど、「軀  
を言へばアナタもまたアンマリな事があります」 (『細君』四)

助詞(「の」「を」)を伴う(4)、(5)の「一体」は名詞であるが、先に挙げたような辞書的意味は適合しない。それぞれの文は、(4)「あなたは時折意地悪なことをお言いだが、もとの性根は真つ直ぐなお方だな」、(5)「こういう訳でこうだから私も悪いけれど、もとを言えばあなたにもあんまりなことがあります」と解釈するのが自然であるため、これらの「一体」自体には「もと」などの物事の根源を表す意味があると考えられる。これが副詞に転じる前段階のものではないだろうか。

#### b 「一体」・「非疑問」形式の変遷

近世文学、近代文学から採取した用例を並べてみると、「一体」・「非疑問」形式同士でも、述べる内容に対する話者の主観の入り具合に差が見られた。これは「一体」を

含む文全体を捉えて判断するものであるが、今回その違いを大きく三つに分類した。すると、歴史的に話者の主観によらない内容から話者の主観のみに頼った内容へと、段階的に変化する様子が窺える。

(6) 一体ねぎまつるといふ事は、御げんのふしをおねがひ  
まうしてゐるといふ事さ (『浮世床』初・中)

(7) いつたい忠臣蔵五番目と申しまするは、エ、まづかひ  
つまんでお話し申しますが、さるお屋敷の浪人に、定  
九郎と申すわるものがござりまして、…後略 (『花暦八笑人』四・下)

(6)は、受け取った手紙の中に書かれている「ねぎまつる」について、説明している文である。手紙には「いづれちかきに御げんのふし(お目にかかるとき)をねぎまつるになん」と書かれており、この場合の「ねぎまつる」が用例中の「御げんのふしをおねがひまうしてゐる」の意であることは、この話者でなくとも読み取れることである。(7)は、茶番狂言で忠臣蔵を演じることになった男の言葉で、後略以下も「忠臣蔵五番目」の梗概が語られている。以上の二例は、記録のある事実的なものを述べているだけで話者の主観などは表れていない。このような話者の主観によらない事柄を述べたものを《I類》とする。

一方、次例では根拠を提示した上で話者の判断、主張が

なされている。

(8) 一休おいらア吉原で育たから、深川へゆくくと水あたりかするヨ。  
〔繁千話〕

(9) 一鉢この海ハ青錫なんぞから思ふと北にあたつてゐるといふことだからちツたア怜シイはづだがだんく暑サが増スやうだぜ  
〔西洋道中膝栗毛』八・下)

(10) 一休、うぬが身を定ねへほどの奴だから、性根がすはず、魂が迷つてゐるゆゑ、為程の事がしつくりと落ちて着かぬものよ。  
〔浮世床』初・下)

以上三例には話者自身の判断、主張がなされているが(波線部)、それを根拠付けるような内容が先に提示され、大枠で「一休〇〇だから□□だ」という形にある。根拠が提示されるといふことは、話者の判断、主張の全てが自身の主観のみによらないことを思わせる。(8)の話者は、自身が吉原育ちであることを根拠として「深川へゆくと水あたりがする(体に合わない)」と主張する。(9)は、航海中の場所が青錫から考えたと北に位置するという伝聞の情報を根拠に「少しは怜しいはずだが、だんだん暑さが増すようだ」と言っている。(10)は話題に上った人物の性質について、自分の身を定めないうような人間だから「性根がすわらず」、魂が迷っているため「することがしつくり落ち着かないのだ」と判断している。しかしこの(10)の場合、提示した根

拠が人間の性質であるため、それ自体が話者自身の主観によっているともいえる。以上のように、根拠を提示した上で話者の判断がなされているものを《Ⅱ類》とする。

そして次例では根拠にあたる部分が無く、「一休」以下に直に話者の主観による判断がなされている。

(11) 乃公の身分に係はる恥だ、実に怪しからん非常な不埒だ、一鉢手前が生意気だ…(後略)  
〔細君』四)

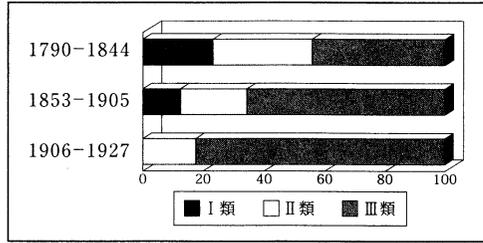
(12) 當然さー貴方は一體水臭いんだ!!  
〔續々金色夜叉』

(13) 一てえ人間程ふてえ奴は世の中に居ねへぜ。  
〔吾輩は猫である』一)

(11)は無断で金策をした妻に対して、「生意気だ」と怒りをぶつける夫の台詞、(12)は、口論になり相手の性質について罵っている場面、そして(13)は、捕えた鼠を人間に取りあげられたとして、機嫌を損ねている猫の台詞である。いずれも、話者の主観による判断、主張のみの内容である。このようなものを《Ⅲ類》とする。

以上の三類の比率と変化の様子をグラフ化した。尚、時代の区分は、今回採取できた「一休」非疑問形式の例、計一一〇例を量的におよそ均等になるように分けたものである。

(1790~1844)『繁千話』『傾城買四十八手』『傾城買二筋道』『酪



このグラフによると、(1790～1844)期の作品では三類ともに出現していたが、その後徐々に《Ⅲ類》の比率が高くなり、(1906～1927)期では全体の八割を越えている。用例実数が少ないため、具体的な数字の正確性には乏しいが、結果的には、歴史の流れとともに「一体：非疑問」形式の文が、話者の主観によらない内容から、話者の主観的判断のみの内容へと段階的に変化していく様子が窺えるのではないか。

酌気質』『浮世風呂』『浮世床』『花暦 八笑人』『滑稽和合人』『東海道四谷怪談』『修紫田舎源氏』『春色梅児譽美』  
(計四十四例)

(1853～1905)・『與話情浮名横櫛』『妙竹林話 七偏人』『西洋道中膝栗毛』『牛店雑談 安愚楽鍋』『春雨文庫』『島衛月白浪』『細君』『金色夜叉』『續金色夜叉』『續々金色夜叉』『高野聖』『吾輩は猫である』(計三十二例)

(1906～1927)・『坊ちゃん』『二百十日』『野分』『虞美人草』『半日』『田舎教師』『食堂』『行人』『道草』『明暗』『芋粥』  
(計三十四例)

このグラフによると、(1790～1844)

c 「一体：非疑問」形式から「一体：疑問」形式へ

では何故「一体：非疑問」形式から「一体：疑問」形式へと交替したのか。近世文学の副詞「一体」が殆ど疑問を導かない例であることは前出の表1に示した通りであるが、『東海道中膝栗毛』には「一体：疑問」形式の例が三例あった。

(14) いったいおまいは、どこを尋ねさんのじやいな。参宮じやあろが、おひとりか。  
(五編・追加)

(15) いったいいきさまは、何病ひじや  
(五編・追加)

(16) よふおとがいならすわるじやな。いったいわりや、どのもんじやい  
(六編・下)

この期の作品で採取できた「一体：疑問」形式は上記の三例だけだが、少なくともこの時代の副詞「一体」には、疑問を導くもの・導かないものという機能上の明確な使い分けの意識は無かったのではないかと考える。すなわち、副詞「一体」は話者の判断、主張を強調することも、疑問を導くことも可能として考えていたことになる。それが後者に傾いていった要因として考えられるのは、他の副詞との関係である。話者の判断、主張を強調する副詞なら、「一体」の他にも、

(17) ホンニあきれらア、ぐわんをきかねへてるくぼうづを見るやうに、よくねてばつかり居るぜ

〔傾城買四十八手〕やすひ手)

(18) 衆さんに聞たが、寔に手のあるほどのい、女だといふこつた。 (『春告鳥』五・十)

(19) 折角洋航して世界有名の誣祿のピラミドを見物しねへのが遺憾ダヨこりやあ全く北さんのおかげだネ (『西洋道中膝栗毛』十一・上)

など、数多くあったのに対し、疑問を導く副詞というものは多くなかったのではないだろうか。つまり、「一体…非疑問」形式から「一体…疑問」形式に変化したのではなく、「話者の判断、主張を強調する機能」を他の副詞に任せ、自身は疑問を導く副詞としての立場をとったということである。

## 五、「一体」と「全体」

ここで「全体」、「惣体(総体)」という漢語副詞にも注目したい。これらの副詞も近世文学、近代文学では頻繁に出現していたため、「一体」の調査範囲に限って採取しておいた。特に「全体」の方は、これまで述べてきた「一体」と同様のタイプ分けが出来、変遷の様子もよく似ているようである。

(20) おめへん所の肝右エ門さんなんざア、全体氣前が能から靜だ。おらん所の氣位とは雲泥万里の違よ

(『浮世風呂』二・下)  
(21) ぜんてへおめへがいちがきたねへからこんな事になりゆくの大口はわざハひのもとダ (『西洋道中膝栗毛』四・上)

(22) 全体山の上でバイオリンを弾かうなんて、ハイカラをやるから、おどかされるんだ (『吾輩は猫である』十一)

以上(20)～(22)では、根拠にあたる事柄を提示した後で、話者の判断や主張がなされている。「一体」で分類したところの《Ⅱ類》に相当する。(20)は、会話相手の夫(肝右エ門)の性質について述べている。氣前がいいという話者なりの根拠を挙げ、「靜だ」と判断している。(21)は、弥次郎兵衛と一緒に畑で盗み食いをしたのが土地主に見つかり、散々懲らしめられた後の北八の台詞である。この災難を「おめへ(弥次郎兵衛)がいちがきたねへから」と根拠付けている。(22)は、夜の山でバイオリンを弾こうと出掛けたが、途中で得体の知れない叫び声があったのに驚いて、そのまま弾かずに帰ってしまった、という友人の話聞いての一言である。山の上でバイオリンを弾こうなんてハイカラをやるから、と根拠を提示した上で「おどかされるんだ」と述べている。

一方、次例では、話者の主観のみに頼って、判断や主張がなされている。

(23) ぜんてへ、おめへさんにやア、てからよりしのおがよ  
く似合ます。(『錦之裏』)

(24) 左様サ、ぜんてへ茶番に忠臣蔵もあんまり古いネエ

(『花暦 八笑人』四・下)

(25) 全体あの車屋の神さんは気に食はん奴だ

(『吾輩は猫である』三)

以上(23)～(25)は話者の判断、主張のみの内容であり、「一体」  
で言えば《Ⅲ類》に相当する。(23)は髪結い屋から遊女に向  
けた言葉である。「あなたには手柄鬘より忍鬘がよく似合  
います」。(24)は、茶番狂言で忠臣蔵五段目を演じることに  
物足りなさを感じている男が、会話の中で漏らした台詞で  
ある。「茶番狂言で忠臣蔵を演じるのもあまりに古いね」。  
(25)は、近所の住人に自宅を覗かされていたと知り、不快  
に思った話者が発した一言である。上記三例はいずれも、  
話者の主観的な判断、主張のみがなされている。

勿論「全体」にも次例(26)、(27)のように疑問を導く例がある。  
(26) ぜんてへ是はどふいふ訳か、さつぱりわからねへ。

(『東海道中膝栗毛』發端)

(27) あなたの所へ水島寒月といふ男が度々上がるさうです  
が、あの人は「全体」どんな風な人なんでせう

(『吾輩は猫である』三)

これまでに挙げてきた「全体」の例はほんの一部だが、「全

体」のみに絞って綿密な用例調査を行えば、「一体」と同  
じような変遷の様子が見られるものと考えられる。

一方、「惣体」は次のような例である。

(28) 惣躰観音といふものは跡かまはぬで尻くらい。

(『新うすゆき物語』中)

(29) 酔ッていふぢやアねけれど、惣体胸ツくそのわりい

家台骨だ。

(『酩酊氣質』上あくたい上戸)

(30) そうたいいまのわかい藝者しゆうハふざけてゐるハネ

ちつとおきやくにからかハれるとなきだしたりざしき  
をもらッて帰るのヤレあのお座敷へハでられないのと

(『安愚楽鍋』二・下 歌妓の坐敷話)

(28) 「跡かまはぬで尻くらい」とは、新日本古典文学大系

『竹田出雲 並木宗輔 浄瑠璃集』の脚注に「あとは知らん顔、

の意」とある。観音が「跡かまはぬ尻くらい」であるとい  
うことは、その当時言われていたことかもしれないが、客

観的な事柄ではない。(29)の話者は酒に酔って自分の家に対  
して「胸こそ悪い屋台骨だ」と悪態をついている。(30)は、

年増の芸者が若い芸者衆について不満を漏らしている。「今

の若い芸者衆はふざけている」というのも話者の主観のみに  
に任せた発言である。今回採取できた「惣体」の文は殆ど

がこのような話者の主観的判断のみの内容(「一体」の場  
合の《Ⅲ類》)であり、「一体」や「全体」程の段階は見られ

表2:「惣体」,「全体」,「一体」の出現状況

作品名	年代	疑問			非疑問		
		惣体	全体	(一体)	惣体	全体	(一体)
新うすゆき物語	1741						
仮名手本忠臣蔵	1748				2		
遊子方言	1770					2	
伊達娘阿国戯場	1783				1	1	
通言 總論	1787					2	
繁千話	1790					3	3
傾城賈四十八手	1790						1
錦之裏	1791					1	
傾城賈二筋道	1798				1	1	1
東海道中膝栗毛	1802-09-14	2	3	2	6		
顔訂気質	1806			1	1	1	1
浮世風呂	1809-13				5	6	10
浮世床	1813-14	1				4	8
花暦 八笑人	1820-34-49					5	9
滑稽 和合人	1823-41-44					2	2
東海道四台怪談	1825						2
傑作田舎源氏	1829						5
春色梅兒鬘美	1832					3	1
春色扇巴之團	1833		1	1	1		
春告鳥	1836					4	
與話傳浮名機噺	1853			5			2
妙竹林怪 七個人	1857-63					9	1
西洋道中膝栗毛	1870-76			2	2	13	6
牛店雜談 安愚索納	1871-72				1	3	1
奇笑新聞	1875		1				
春雨文庫	1876					2	1
人間万事金世中	1879		1				
鳥衛月白浪	1881		1				1
浮雲	1887-89	4				4	
細君	1889		1				5
たけくらべ	1895	2					
金色夜叉	1897			5			2
續金色夜叉	1898			3			4
續々金色夜叉	1899-1901						1
高野聖	1900		1				1
新續金色夜叉	1903		1				
吾輩は猫である	1905	15	23			4	7
坊っちゃん	1906	1	3				6
草枕	1906		2			2	
二百十日	1906					7	1
野分	1907	3	1			1	2
虞美人草	1907	9	5			2	2
三四郎	1908	2	4		1		
半日	1909		1				3
それから	1909	3	6				
田舎教師	1909		4				2
門	1910	1	5				
食堂	1910		4				1
彼岸過迄	1912	3	7				
行人	1912-13	6	11				3
こころ	1914		5				
道草	1915		11				1
明暗	1916	2	49				12
浮城	1916		1				1
偷査	1917		1				
地獄変	1918		2				
蜘蛛の糸	1918		1				
邪宗門	1918		4				
杜子春	1920		1				
藪の中	1922		1				1
河童	1927		1				1
斜陽	1947		5				
グッド・バイ	1948		1				
計		0	54	185	16	90	110

ず、また「惣体：疑問」形式の例も見られなかった。  
 以上のような「全体」「惣体」「一体」の出現状況を表2に纏めた。  
 資料は「惣体」、「全体」、「一体」のうち、いずれかが出現しているもののみを挙げている。

表2を見ると、今回の調査範囲で最初に出現したのは「惣体」(『新うすゆき物語』1741)で、次に「全体」(『遊子方言』1770)、最後に「一体」(『繁千話』1790)であり、また廃れていく順序も「惣体」が一番早く、次いで「全体」であることが分かる。「惣体」が早期に消滅した理由については、二つのこと

が考えられる。一つは、この語の語彙的意味に関することである。「惣体」の語彙的意味は『日本国語大辞典』第二版によれば、「ある物事の全体。物事のすべて」であるが、これは「全体」の語彙的意味と重複しているといえよう。また、もう一つは機能に関することである。「一体」や「全体」には話者の主観的判断、主張を強調する機能と、疑問を導く機能の両方があったのに対し、「惣体」には疑問を導く機能が(少なくとも、今回の調査では)見られない。以上のことを踏まえると、「惣体」には「一体」や「全体」とは異なる独自の要素が欠けており、そのことが早い段階

で消滅するのに繋がったと考えられる。

更に、「全体」と「一体」のうち何故「一体」が現在まで残ることになったのかということに関して、それぞれの語彙の意味が関係していると考ええる。「一体」の語彙の意味は前述した通り、数を数える時の言い方など、あまり確定的でない。それに対し「全体」は「身体の全ての部分」、「物・事柄の全部」、「機構・組織など、ひとまとまりのもの」の残らず全部」(『日本国語大辞典』第二版)と、意味として固定されている。これが両者の違いであるが、疑問を導く機能として記号的に用いられるのにどちらが適していたかといえ、文の内容に支障を来さない方、つまり語としての意味が確定的でない「一体」の方だといえる。よって「全体」は、副詞的機能を「一体」に任せ、自身は名詞としての立場をとることになったのだらう。これにより、「一体」は疑問を導く副詞として定着してきたのだと考えられる。

## 六、結論

1 疑問を導かない副詞「一体」には、話者の判断、主張を強調する機能がある。

2 「一体」：非疑問」形式の文の内容は、話者の主観によらないもの(Ⅰ類)から判断、主張が全て話者の主

観によるもの(Ⅲ類)へと段階的に変化していく様子が窺える。

3 副詞「一体」には本来、話者の判断、主張を強調する機能と、疑問を導く機能の両者があつたと考えられる。それが現代までに疑問を導く機能のみが定着した要因として、他の副詞との関係が挙げられる。話者の判断、主張を強調する機能を持つ副詞は「ホンニ」、「寔に」、「全く」など数多くあつたために、「一体」は専ら疑問を導く機能を持つに至つた。

### 参考文献

- ・『日本国語大辞典』第二版 小学館
- ・『日本語文法大辞典』明治書院
- ・新日本古典文学大系『竹田出雲 並木宗輔 浄瑠璃集』岩波書店
- ・橋本進吉(1959)『國文法體系論』岩波書店
- ・村田美穂子編(2005)『文法的时间』至文堂
- ・森岡健二(2001)『要説 日本文法体系論』明治書院
- ・森田良行(2002)『日本語文法の発想』ひつじ書房
- ・森本順子(1994)『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版

古文引用(用例のルビなどは適宜省略した)

- ・日本古典文学全集『洒落本 滑稽本人情本』小学館
- ・日本古典文学大系『浮世風呂』『東海道中膝栗毛』岩波書店

- ・ 日本古典文学大系『黄表紙洒落本集』岩波書店
- ・ 有朋堂文庫『花曆八笑人滑稽和合人妙竹林話七偏人』
- ・ 明治文学全集『明治開化期文学集(二)』『尾崎紅葉集』筑摩書房
- ・ 新日本古典文学大系明治篇『坪内逍遙二葉亭四迷集』岩波書店
- ・ 『漱石全集』岩波書店